北九州市立文学館 ニュース

文学の栞（しおり）

Kitakyushu Literature Museum News

第35号

2024年3月31日発行

いのちなりけり

館長　今川　英子

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（新古今集）

昨年十一月に急逝された近藤晉平さん（享年八七）が、かつて請われて熊本県球磨郡多良木町に調査に行かれての帰り、文学館に立ち寄られてふと口にされた和歌です。

西行が六九歳の時、東国下向の途次に詠んだ歌で、「小夜の中山」を年老いて今また越えることのできた感慨を、「命なりけり」の句にこめています。その感慨の向こうに、これまで歩んできた全生涯の重みまでも感じさせる人生の詠嘆と、深い滋味を汲みとることができます。

近藤さんは、高校で教鞭をとる傍ら、与謝野鉄幹・晶子の研究に勤しみ、ことに九州における調査研究の第一人者でした。当館での二〇〇八年春の特別企画展「与謝野鉄幹・晶子展―恋ひ恋ふ君と―」では、「第三部　九州での足跡」の監修を依頼し、与謝野夫妻の一九一七年の北九州若松来訪と、翌、翌々年の阿蘇・内牧温泉と人吉訪問の詳細が、丹念な調査により明らかになりました。その延長上で多良木町の宮本尚書斎での、「明星」終刊後刊行された「冬柏」の全冊揃いの発見が、後に全二六巻の復刻につながります。いつもダンディで古武士のごとく毅然とされ、研究への潜熱的な情熱を失わず、学芸員を温かく励ましてくださいました。

同じく文学館友の会理事としてご尽力いただいた石川一歩さんが、昨年九月に逝去されました。享年八四。俳誌「色鳥」を主宰されていましたが、二〇一九年一〇月号に、「一身上の都合により、唐突ではありますがこの号（通算二一四号）を以て終刊します」という挨拶文が挟まれてあり、皆、驚いたものです。何時も穏やかで笑みを絶やさず、北九州俳句協会をまとめ、何事においても公平に判断される方でした。

そしてこの三月、思いがけず、中尾三郎さんの訃報が入りました（享年八二）。今、北九州で発刊される同人誌としては最も分厚い「九州作家」の代表で、昨年四月、創刊七〇周年をお祝いしたばかりでした。地元で活躍された評論家の星加輝光さんに最期まで寄り添われました。

文学館設立前後から、陰になり日向になり文学館を支えてくださった方々です。その思いを受け継ぎ、文学館の次のステージを目指さなければならないことの責任を新たにしています。

季節は確実に巡り、桜の季節になりました。「いのちなりけり」といえば、葉室麟の小説のテーマにもなっている次の和歌が浮かびます。

春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり（古今集　よみ人知らず）

桜は毎年花の盛りを迎えるけれど、その盛りに出会うことができるのは、わが命あってこそということでしょうか。さらに思い浮かぶのは、

年々にわが悲しみは深くしていよ、華やぐいのちなりけり

岡本かの子の小説「老妓抄」の末尾の歌です。老いと近づく死を自覚しながら、だからこその命の華やぎを渇望する想いでしょうか。

「いのちなりけり」という言葉には、千年以上にもわたって、生きていることの深い感慨がこもごも込められて発せられてきました。

卒業式、入学式の季節でもあります。希望に満ちた未来に巣立つ若者たちに、地球の平和を託し、「生きよ」と、心の底から希（ねが）うものです。

目　次

- 巻頭コラム「いのちなりけり」 …… 1
- 第33回特別企画展 …… 2
  「写真と文学でたどる日本の世界文化遺産」
- 開会記念講話「『明治日本の産業革命遺産』のみどころ」 …… 3
- 関連講座①「北九州市の世界遺産」
- 関連講座②「廃墟か、遺産か
  ～文化財・文化遺産・文化資源を想い、魅力を育むまちづくりへ～」
- 関連講座③「官営製鐵所の八幡立地：安川敬一郎書簡等を読む」
- 第10回林芙美子文学賞　表彰式・記念トーク …… 4
- 第15回　子どもノンフィクション文学賞 …… 5
- 第14回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール
- 収蔵資料紹介　火野葦平「木綿襍志」（2） …… 6
- 講座　村田喜代子の「こんな本、読んだ？」 …… 7
- 生き生きとした作品あつまる「櫓山荘子ども俳句大会」
- 2023年度下半期「偲ぶ会」
- 〈共催〉福岡県川柳史展
- 「文学館友の会」新規会員を募集
- 「北九州市立文学館紀要」第６号刊行
- 展覧会開催予告 …… 8
- 〔第34回特別企画展〕
  竹久夢二展（仮）
- 〔第35回特別企画展〕
  門司と文学（仮）
- お祝い、お悔やみ／寄贈者・提供者、提供雑誌

二〇二三年度秋の特別企画展は、「写真と文学でたどる日本の世界文化遺産」展を開催しました。

北九州市は世界遺産のある街です。市制60周年を記念し、日本国内に二〇件ある世界文化遺産を名作写真の数々と文学の言葉で一望する展覧会です。

○構成

【時代】文化遺産名

【縄文】北海道・北東北の縄文遺跡群

【古墳】百舌鳥・古市古墳群―古代日本の墳墓群―

【古代】「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群，富士山―信仰の対象と芸術の源泉―

【飛鳥～奈良】法隆寺地域の仏教建造物，古都奈良の文化財

【平安】古都京都の文化財，紀伊山地の霊場と参詣道，平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―，厳島神社

【鎌倉～室町】古都京都の文化財

【安土桃山～江戸】姫路城，古都京都の文化財，日光の社寺，石見銀山遺跡とその文化的景観

【幕末～明治】明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業，富岡製糸場と絹産業遺産群

【昭和】原爆ドーム

ほか、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」「白川郷・五箇山の合掌造り集落」「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」も展示。

○出典作家（生年順、敬称略）

入江泰吉　渡辺義雄　土門拳
西川孟　岡本茂男　柴田秋介
牧野貞之　江成常夫　藤塚光政
水野克比古　田村仁　藤原新也
三沢博昭　管洋志　石橋睦美
永坂嘉光　三好和義

（展示写真＝九一点）

来場者の声（アンケート）

・楽しかったです！　自分がその世界遺産に行った時に感じたことと展示の写真、文章をひき比べながら見られるのがよいと思います。また、「この遺産にどの名文があてがわれているのか」と予想しながら見る楽しみもありました。（20代・千葉県）

・世界遺産がとても身近に感じられる内容でした。写真の美しさはもとより、それぞれの文学からのピックアップもすばらしかったです。仁徳天皇の民を思う心にも感動しましたし、源氏物語の現代語訳の読み比べも面白かったです。一つ一つをゆっくり、ていねいに見たいと思えるすばらしい展示でした。（60代・戸畑区）

開会記念講話
「明治日本の産業革命遺産」のみどころ

二〇二三年一〇月二八日

講師：日比野利信さん

（北九州市立自然史・歴史博物館学芸員）

なぜ、北九州市は世界遺産のある街になったのか。古来交通の要衝だったこと、近隣の筑豊の石炭に恵まれたことなど、北九州の歴史からお話いただきました。たたら製鉄がどのように近代製鉄へ発展し、八幡製鐵所が設立されたのかについて、「明治日本の産業革命遺産」のストーリーから解説していただきました。

8県、23構成資産にわたるこの遺産の広がりを、一つのチームとして見る、さらには周りの関連資産や対象時期の前後にも空間と時間を拡充して捉えることの重要性を指摘されました。

参加者の声（アンケート）

・明治日本の産業革命遺産の広がり、関連がよく分かり、理解が深まりました。ありがとうございました。（60代・小倉北区）

関連講座①
北九州市の世界遺産

二〇二三年一一月一八日

講師：井上保之さん

（北九州市市民文化スポーツ局長）

講師は、「明治日本の産業革命遺産」が世界遺産に登録される際、北九州市の担当者として活躍されました。

講座では、世界遺産とは何か、から順を追って、その仕組みや背景をお話いただきました。

現役の稼働工場を含む構成資産を世界遺産に登録するという、講師が取組まれた前例のないプロジェクトには会場全体が引き込まれました。また、日本製鐵が所蔵する、貴重なガラス乾板の解説に、設立当初の官営製鐵所の様子が浮かび上がりました。

参加者の声（アンケート）

・全体的に非常に面白かったですが、特に「登録までの苦難」は極めて興味深かったです。最初から最後まで高い熱量でお話しいただき、楽しい時間でした。ありがとうございました。（50代・福岡市）

関連講座②
廃墟か、遺産か～文化財・文化遺産・文化資源を想い、魅力を育むまちづくりへ～

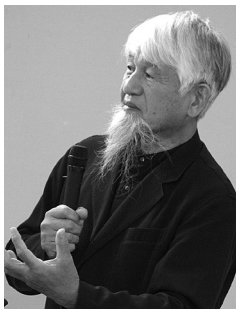
二〇二三年一二月二日

講師：藤原 惠洋さん

（建築史家、九州大学名誉教授）

文化資源の創造的活用に取組まれる講師は、まず豊かな現場探訪の様子を紹介されました。その実例を通して、文化資源の価値は予め備わっているのではなく、市民一人ひとりがそれについて考え、価値を創出していく重要性を指摘、「残すことは創造だ」と話されました。

質疑応答では、世界遺産に求められる「普遍的な価値」の問い直しをめぐり、活発な議論が交わされました。



参加者の声（アンケート）

・世界遺産や登録に関する、根源的な問いかけをしていただいたと思いました。遺産を根源的に見なければ、それは「単なる古いもの」や「人よせパンダ」的なものになってしまうということかも、と思いました。（60代・小倉南区）

関連講座③
官営製鐵所の八幡立地：安川敬一郎書簡等を読む

二〇二三年一二月一七日

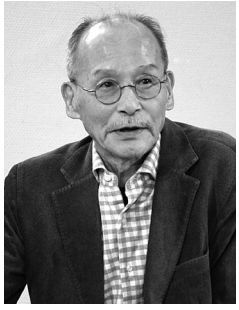
講師：清水 憲一さん

（九州国際大学名誉教授）

講師は、テレビ番組「ブラタモリ」の北九州の回（二〇二三年一〇月放送）で案内人を務められました。

講座では、官営製鐵所はなぜ八幡に建ったのか、という問題を取り上げました。誘致や立地に関する動向を、史料からつぶさに検証し、これまでの通説をいくつも改められました。

テレビに収まらなかった詳しい解説に、会場からは驚きの声が上がっていました。



参加者の声（アンケート）

・先生の細かい調査資料、たいへん興味深いものでした。たくさんの通説との差異も参考になり勉強になりました。八幡立地までの多くの人の多くの努力があって近代の礎ができたことに感動しました。（70代・小倉南区）

第10回林芙美子文学賞 表彰式・記念トーク

二〇二四年二月二五日

今回で10回目を迎えた林芙美子文学賞の表彰式・記念トークをJ：COM北九州芸術劇場中劇場にて開催しました。（参加者：180人）

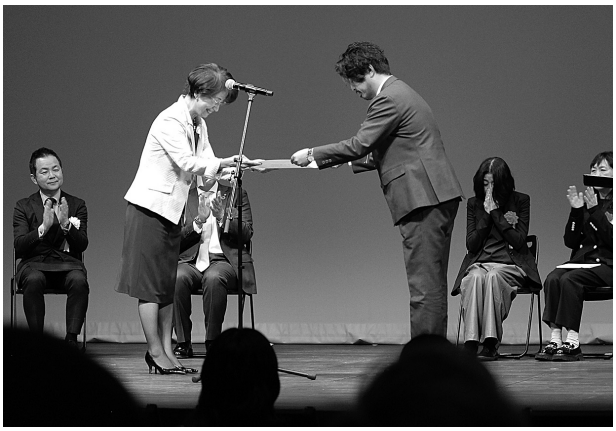
●表彰式

全国から寄せられた四五〇編の応募作品の中から、大阪府在住の大原鉄平（おおはらてっぺい）さんの「森は盗む」が大賞に、また福岡県在住の鈴木結生（すずきゆう）さんの「人にはどれほどの本がいるか」が佳作に選ばれました。

表彰式には、最終選考委員の井上荒野さん、角田光代さんが出席されました。（例年ご出席いただいています川上未映子さんは都合により残念ながらご欠席となりました。）

大原さん、鈴木さんには北九州市立文学館の今川館長から、表彰状と盾、副賞（大賞は一〇〇万円、佳作は一〇万円）が授与されました。

大賞受賞の大原さんは、「二一歳の時に小説を書き始めたものの、就職もせずに両親からは小説家になることを反対されていた。しかし二人の祖母に励まされここまで書き続けることができたと思う。これからは編集部の方をはじめ皆様に育てていただき、いい本を書いていきたい。」と語りました。



今川館長から表彰を受ける大原さん

佳作受賞の鈴木さんは、「林芙美子という素晴らしい文章を書く人の名がついた賞をいただいたこと、また現在素晴らしい小説を書かれている選考員の方々に選んでいただけたことは自分にとって幸福でした。」と語りました。

最終選考委員からは、大賞作品は「普通に働く女性を主人公にして、普通の日々のことを書きながら、普通ではない感じを丁寧に書いている。場面の作り方やエピソードの選び方が一つ一つ考えられている。」「名前のつかない分類されない関係であったり、役割を持たない一人一人の存在を独特な形で肯定している小説である。」などの選評をいただきました。

佳作作品は、「書籍に関する知識に裏打ちされた小説で著者自身の強みでもある。今後この強みを生かしてどういう小説を書いていくのかがすごく楽しみである。」「書物の知識がある場合は、著者自身が知識をひけらかすような作品が多いが、この作品にはそれが感じられない。本が全く生産性がないものとして扱われ、生産性がないものが人の内部で豊かに醸造されていくことに胸を打たれた。」などのコメントをいただきました。

●記念トーク

表彰式に続き、「この十年を振り返る―選考・仕事・生活」をテーマに、これまでの選考および活動状況などについて、最終選考委員の皆さんから話を伺いました。（聞き手：今川館長）

記念トーク（最終選考委員と今川館長）

【井上荒野さん】

これまで選考員それぞれが、ジャンルに固執せず執筆活動を続けてこられたことも幅広く作品を応募いただけた結果なのではないか。

これまで年間約二冊ペースで書いてきたが、『あちらにいる鬼』（朝日新聞出版）では瀬戸内寂聴さんと直接父の井上光晴の話ができたことも思い出される。また昨年、名作映画「テルマ＆ルイーズ」をオマージュし、自由に人生を楽しむ老女を描いた『照子と瑠衣』（祥伝社）を刊行した。

【角田光代さん】

十年文学賞を続けることは大変で、これからも作家の発掘・育成の重要性が増してくると思う。

当初三年間の予定だった『源氏物語（上・中・下）』（河出書房新社）を五年で訳し、これまでになかったわかりやすさ・読みやすさに努めた。『タラント』（中央公論新社）は自分の作風にも気づきを与えてもらった作品で、思い出深い。今後については文庫版『源氏物語』の編集作業が終了してから新たな作品に挑戦していきたい。

来場者の声（アンケート）

・作家の方々の生の声が聞けて大変良かった。（50代・小倉北区）

・受賞者二人とも大物の予感がします。（70代・小倉南区）

・今回の受賞作品を読むのが楽しみです。（40代・戸畑区）

第15回　子どもノンフィクション文学賞

二〇二四年三月二三日

この文学賞は、子どもたちが体験した出来事や取材したことを「ノンフィクション」に書くことで、人々や社会への関心を持つきっかけとなること、そして北九州ゆかりの文学者たちが築いてきた豊かな文芸の土壌を継承していくことを願って二〇〇九年から開催しています。

今年度は、小学生の部は二一四作品、中学生の部は二五一作品、計四六五作品の応募がありました。

表彰式は文学館交流ひろばで行われ、武内和久市長や最終選考委員のあさのあつこさん、最相葉月さん、リリー・フランキーさんにご出席いただき、受賞者の皆さんへ盾と副賞が贈られました。受賞者の皆さんからは、それぞれ受賞の喜びの声を語っていただきました。

表彰式

表彰式には過去の大賞受賞者である梅田明日佳さん、座間耀永さんがお祝いにかけつけ、受賞者に暖かいメッセージを届けてくれました。

受賞者　小学生の部（敬称略）

大賞＝能美にな（明治学園小学校）、優秀賞＝高橋杏（日本女子大学附属豊明小学校）田之上心乃花（南九州市立宮脇小学校）、選考委員特別賞＝小川彩有里（高槻市立大冠小学校）中川瑞祥（朝倉市立杷木小学校）川口颯（西武学園文理小学校）、学校団体賞＝西武学園文理小学校

受賞者　中学生の部（敬称略）

大賞＝野田真秀（さいたま市立浦和中学校）、優秀賞＝内田博仁（神奈川県立あおば支援学校中学部）チャケ・レオン（Jakob-Fugger-Gymnasium）、選考委員特別賞＝林翠恋（上越教育大学附属中学校）宮﨑大輔（和歌山県立桐蔭中学校）清武琳（東福岡自彊館中学校）、学校団体賞＝さいたま市立浦和中学校、淑徳巣鴨中学校、和歌山県立桐蔭中学校

第14回「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクール

二〇二三年一二月九日

北九州市出身の詩人・宗左近、みずかみかずよを顕彰するとともに、子どもたちの豊かな想像力と表現力を伸ばすことを目的に、「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールを実施しました。

第14回目を迎える今年度は、北九州市内外から小学生の部に九二作品、中学生の部に一一四作品、計一二〇六作品の応募がありました。表彰式は文学館交流ひろばで行われ、最終選考員の平出隆先生の講評や最優秀賞・優秀賞受賞者による詩の朗読がありました。

受賞者　小学生の部（敬称略）

宗左近賞＝芳賀菫（国府台女子学院小学部）、みずかみかずよ賞＝白石あさひ（敬愛小学校）、北九州市長賞＝野入桃子（明治学園小学校）、北九州市教育長賞＝能美にな（明治学園小学校）、北九州市立文学館長賞＝前田葉奈（北九州市立小倉中央小学校）、佳作＝10名、学校団体賞＝北九州市立貴船小学校、北九州市立中島小学校

受賞者　中学生の部（敬称略）

宗左近賞＝澤野美菜（大阪教育大学附属池田中学校）、みずかみかずよ賞＝西山未羽（糸島市立志摩中学校）、北九州市長賞＝越智偉央里（福岡市立板付中学校）、北九州市教育長賞＝井上心彩（八女市立上陽北汭学園）、北九州市立文学館長賞＝佐野智紀（福岡市立板付中学校）、佳作＝10名、学校団体賞＝福岡市立板付中学校、立命館中学校

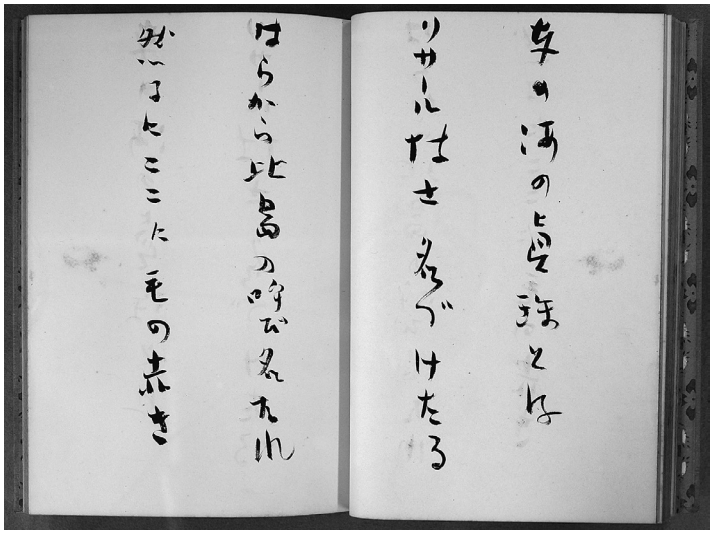
〈小学生の部〉

〈中学生の部〉

収蔵資料紹介　火野葦平「木綿襤褸（ざっし）志」（2）

前号に引き続き、火野葦平の自筆資料「木綿襤褸志」を紹介します。判型等の資料の詳細は前号を参照してください。今回は後半部の「比島出陣賦」を見ていきます。

「比島出陣賦」は文語定型詩の体裁で、末尾に反歌が記されており、その後に日比野士朗による短歌が見開きで書かれています。冒頭にはタイトルと「皇紀二千六百五年元旦」の日付があり、一九四五年元旦に記されたもので、一九四四年一二月にフィリピン従軍を命じられた際に書かれたものです。このフィリピン従軍は、作家の里村欣三、今日出海、日比野士朗とともに命じられ、一二月二九日に里村と今が先行、葦平と日比野は四五年一月六日に雁ノ巣飛行場から出発予定でした。しかし戦況の悪化により、福岡で五日間待機したものの、結局は中止となりました。以下、本文を紹介します。



「比島出陣賦」冒頭部

【翻刻】

比島[1]出陣賦

皇紀二千六百五年元旦

東の海の眞珠とは／リサール博士[2]名づけたる／はらから比島の呼び名たれ／然るにここに毛の赤き／鼻の曲れる者ありて獣の毛爪鼻にかけ／魔法をもちてたぶらかし／四五十年をのさばれる／東亜のあるじ日の本の／起ちて討ち撃ち拂ひしが／また鬼どもつどゐなし／れいての島[3]へ来りたり／わが友いかにしてあるや／名だたる酒豪かぴんぴん[4]／さては将軍フランシスコ[5]／銃とり敵を邀ふれば／わが勇猛の特攻隊／進撃滅敵時知らず／されば ふたたび筆とりて／眞珠の島へ去なむかな／命のかぎりゆきゆきて／散りてぞ咲かなむ心かな

反歌

大いなるひの光仰ぎつつ／筆と剱をまけのまにまに

をのこわれ／つるぎとり／はきいでゆくと／かえりみすれば／ただ雪のみち

比島戦線にゆくとて　日比野士朗

※／は改行。

【註】

(1) フィリピン諸島のこと。

(2) ホセ・リサール（一八六一―一八九六）のこと。本名はホセ・プロタシオ・メルカド・リサール・アロンソ・イ・レアロンダ。フィリピンの革命家、医師、著作家、画家、学者。フィリピン独立革命の初期の指導者。社会改革を目ざすフィリピン民族同盟を設立、今日でもフィリピンの「国民的英雄」として知られる。一八九六年、スペインからのフィリピン独立を目指す秘密組織カティプナンが蜂起したことで、指導者と誤認され、逮捕、有罪となり銃殺刑に処された。刑の執行前、妹に託した辞世の詩『MI ULTIMO ADIOS』（わが最後の別れ）において、フィリピンを「Perla del Mar de oriente, nuestro perdido Edén」（東洋の真珠、今は無き我が楽園よ！）と呼んだ。また政治小説家の末広鉄腸との交流があり、末広の政治小説『南洋乃大波瀾』（春陽堂、一八九一・六）はリサールをモデルにした作品。

(3) レイテ島。フィリピン中部、ビサヤ諸島の東ビサヤ地方に位置する島。一九四四年一〇月から周辺海域、および陸上で日本軍とアメリカ軍、オーストラリア軍の戦闘が行われた。レイテ沖海戦は史上最大の海戦と言われる。

(4) マテオ・カピンピン。フィリピンの軍人。一九四二年二月に始まった第二次バターン半島攻略戦において、日本軍は四月、サマット山へ侵攻。この戦いでフィリピン軍の師団長であったカピンピンは日本軍の捕虜となった（のち釈放）。この戦いには葦平も従軍しており、『敵将軍』（第一書房、一九四三・十一）には、カピンピンと面会する場面が書かれ、『南方要塞』（小山書店、一九四四・九）収録「デル・ピラル兵営」にもカピンピンが書かれている。（福田淳子「火野葦平と向井潤吉―従軍がもたらしたもの」学苑・近代文化研究所紀要　№959　二〇二〇・九）

(5) フランシスコ・マカブロス・イ・ソリマン（一八七一―一九二二）を指すか。一八九六年、スペインからの独立を目指して戦ったフィリピン独立革命において、カティプナンの革命軍を率いた将軍。

講座　村田喜代子の「こんな本、読んだ？」

二〇二四年二月四日、三月一七日

芥川賞作家の村田喜代子さんが一冊の本とその周辺を語る講座（全二回）を開催しました。

第一回目は、南米コロンビア出身のノーベル文学賞作家、G・ガルシア＝マルケスの短篇「大きな翼のある、ひどく年取った男」を取りあげました。天使らしき翼のある老人が地上に落ちてきて、また天に戻っていくというストーリーです。「空」「天」「飛ぶ」をキーワードに、地球を取り巻く四層など地球科学的な話から、仏教の「山越阿弥陀」の話まで幅広く紹介しつつ、作品を読み解きました。村田さんは特に、真っ直ぐに天に上がっていき「想像上の一点になった」という結末の表現に着目されました。マルケスの描いたような、現実から一瞬のうちに抽象的な世界にいく話の終わり方は、まさに異文化だと話されました。

第二回目は、村田さんご自身の近著『新古事記』について話され、全二回の講座を終了しました。

生き生きとした作品あつまる「櫓山荘子ども俳句大会」

櫓山荘やそこにまつわる文化や歴史を知ってほしいとの思いから、櫓山荘子ども俳句大会実行委員会（北九州俳句協会、北九州市立文学館、北九州市教育委員会、北小倉自治連合会、久女・多佳子の会、小倉北区役所総務企画課）主催で二〇〇五年から毎年開催されているこの俳句大会は、今年度で19回目を迎えました。

今回も、北九州市を中心に、小学校28校、中学校30校、特別支援学校２校の計60校から、五一八〇人の児童生徒のみなさんから作品が届きました。

多数の応募作品の中から、特別賞11作品、秀作36作品、学校賞２校などが選ばれました。

文学館では、一二月九日～一二月二八日の間、本俳句大会の特別賞・秀作に選ばれた作品の展示を行いました。子どもたちの生き生きとした作品になずきながら感心されている方や、照れくさそうに作品と一緒にカメラに収まる子どもの姿などが見られました。

二〇二三年度下半期「偲ぶ会」

一月二一日　久女忌
小倉北区・圓通寺

一月二一日　第64回葦平忌
若松区・若松市民会館

三月二六日　第47回森鷗外をしのぶ春の集い
小倉北区・森鷗外京町住居跡碑前

〈共催〉福岡県川柳史展

二〇二四年三月一日～三一日

川柳くろがね吟社（主宰：古谷龍太郎）主催で、福岡県の川柳の歴史を紹介する展覧会が開催されました。明治・大正期から現代に至るまでの福岡県域の川柳のあゆみを作品とともに紹介、各時代の世相を踏まえつつ、その時代に生きた人びとの人情、風俗を詠んだ作品を楽しく鑑賞できる場となりました。

予告〈共催〉源氏物語54帖 王朝文学を筆にのせて

第46回光草書道展

会期：2024年４月27日（土）～５月６日（月・振休）
会場：北九州市立文学館　企画展示室

関連イベント

特別講演「源氏物語と紫式部」
講師：沼尻利通氏（福岡教育大学准教授）
日時：2024年４月28日（日）13時～14時30分

※４月17日（水）から電話 093-571-1505 で受付開始

「文学館友の会」新規会員を募集

友の会活動は、文学や文学館に関心がある人々が集まり、文学・文芸に関する知識教養、理解を深めるとともに、文学館の活動を支援することを目的とします。どなたでも入会できます。

【会員期間】二〇二四年四月一日～二〇二五年三月（一年ごとの更新）
【会費】二〇〇〇円
【特典】
○常設展がいつでも見られる「年間定期券（年間パスポート）」
○「特別企画展ご招待券」（一枚）
○特別企画展の図録（文学館製作分、一冊）
○文学館が実施する文学賞の「作品集」（一冊）
○イベント、講演会等への優先参加
○館報、友の会会報の送付　など

【入会方法】
文学館の窓口で直接、会費を支払う
専用の振込用紙（郵便局）で振込む
※振込用紙をご希望の方は、文学館までお知らせください。

【問合せ】北九州市立文学館友の会事務局（文学館事務局内）
☎093-571-1505

「北九州市立文学館紀要」第6号刊行

【資料紹介】宗左近〈縄文〉ノート解題・翻刻（2）（稲田大貴・小野芳美）

＊＊＊＊展覧会開催予告＊＊＊＊

第34回特別企画展

「竹久夢二展（仮）」

2024年
7月20日（土）
▼
9月23日（月・振休）

企画協力　株式会社港屋

「婦人グラフ」7月号表紙（七夕）
大正15年

今年は、北九州にもゆかりのある竹久夢二の生誕140年の年にあたります。
展覧会では、夢二の美人画、挿絵、自筆絵画などを展示し、多岐にわたる創作活動を紹介します。

第35回特別企画展

門司と文学（仮）

2024年10月26日（土）
～2025年1月26日（日）

お祝い

・朝比奈秋さん（小説家、第7回林芙美子文学賞大賞）が、第51回泉鏡花文学賞、及び第45回野間文芸新人賞を受賞。
・鷹取美保子さん（詩人）が、第34回伊東静雄賞を受賞。
・川上未映子さん（小説家）が第75回読売文学賞を受賞。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・石川一歩さん（俳誌「色鳥」主宰、元北九州市立文学館友の会理事）二〇二三年九月二八日にご逝去、84歳。
・近藤晋平さん（日本近代文学研究者、北九州市立文学館友の会理事）二〇二三年一一月二七日にご逝去、87歳。
・中尾三郎さん（「九州作家」代表）二〇二四年三月一一日にご逝去、82歳。
心からお悔やみ申し上げます。

■寄贈者・提供者

HI TSUKI GOSEI、KADOKAWA、有川公一、阿木津英、有森信二、石井洋詩、石松昌子、泉鏡花記念館、井上靖記念文化財団『伝書鳩』編集室、井本元義、岩下祥子、大川内夏樹、大阪俳句史研究会、大土由美、緒方和子、岡田功、角川文化振興財団、神奈川近代文学館、菊池寛記念館、北九州文化協会、北九州文化連盟、紀伊國屋書店、九州大学日本語文学会、今日の花書考近代作家旧蔵書研究会、小倉郷土会、さいたま文学館、さかい利晶の杜、重信寛、自鳴鐘同人会事務局　中村重幸、品川洋子、柴田康弘、司馬遼太郎記念館、下村きよ子、新宿区立漱石山房記念館、新宿歴史博物館、鷹取美保子、竹之内靖方、田中幸昭、短歌研究社、調布市武者小路実篤記念館、鶴岡市立藤沢周平記念館、時津みつこ、徳島県立文学書道館、ドナルド・キーン・センター柏崎、鳥影社、中尾勝憲、中尾實信、中原中也記念館、夏野雨、日本現代詩歌文学館、西日本文化協会、沼津市芹沢光治良記念館、能美昌二郎、萩原朔太郎研究会、林芙美子資料保存会、平野啓一郎、福岡ユネスコ協会、藤井紀子、福岡県人権研究所、ふだんぎ北九州グループ、文京区立森鷗外記念館、前田あり子、三鷹市山本有三記念館、森智康（智鈴）、森鷗外記念会、薬師寺裕二、山内克士、山口公和、山崎一穎、行橋市歴史博物館、吉村昭記念文学館、渡辺玄英、渡辺幸一、野田宇太郎文学資料館、柳生じゅん子

■提供雑誌

藍、花鶏、青嶺、青穂、馬醉木、阿蘇、あん、絵合せ、沖、海峡派、GAGA、回游、黄色いひまわり赤のつばき、鯨々、玄海、午前、自鳴鐘、書馨、scripta、粼、川柳くろがね、川柳マガジン、川柳むらさき、第八期　九州文學、鬣、天籟通信、とびうお、新墾、虹野、浜木綿、ふよう、ぽち袋、八雁、遼、りんどう

2024年3月31日 発行

北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/

■ 開館時間
9:30～18:00（入館は17:30まで）
■ 休 館 日
毎週月曜日
（月曜日が休日の場合は開館し、翌日が休館）
年末年始

北九州市印刷物登録番号　2310107C